

ぞろぞろ続いた「ぞろ」談義

初めて知った「ゾロ」の謎

今日のアフターテニスのランチオン・ダベリング会には白砂賢治、大谷康仁、中村正和、それに私・佐々木洋のソケット・メンバーが参加しました。そして、中村さんが連れて行ってくれた平塚のレストラン「ゾロ」が魁傑ゾロではなくて、オーナーの溝呂木(Mimizorogi)さんのお名前に発しているということからゾロ(Zoro)談話が始まりました。ご存知魁傑ゾロは、強きをくじき弱きを助く、大盗賊にして真の紳士。賞金首のお尋ね者でもある反面、虐げられたインディアンをフェアに1対1の決闘に臨むなど、まさしく正義の味方として描かれたヒーローキャラクターなのですが、ご自分のお名前「み(低)ぞ(高)ろ(高)ぎ(高)」から魁傑「ゾ(高)低(低)」を導き出し、お客様から愛される店づくりをされていこうとするオーナーの姿勢が素敵だと思いました。

魁傑ゾロ VS 鼠小僧

ところで、帰宅してから調べてみたのですが、ゾロの名前はスペイン語の「キツネ」(zorro、ソロ)に由来しているのだそうですね。青銅器時代(紀元前3千年-2千年)のスペインでは、キツネが子犬のエサと似たようなものを与えられて家畜化されていたということですから、スペイン人がキツネに対して持っているイメージが日本人が持つイメージと違うのかもしれませんが、なんとしても日本で義賊と称される鼠小僧治郎吉の名と似通ったところがあるのが面白いなと思いました。武家屋敷のみ襲い、盗んだ金を貧乏人に施したという鼠小僧の場合は、忍び込む動作が敏捷なのでこの名で呼ばれたそうですが、ゾロにもキツネに似た敏捷さがあったんでしょうね、きっと。

「ぞろ目」、「ぞろぞろ」、「そぞろ歩き」

さて、魁傑ゾロの話から、ソケット・メンバーの話題は“ぞろ”がらみの話題にソケットしていきました。先ず大谷さんから、「そう言えば、“ぞろ”と言えば“ぞろ目”という言葉がありますね。この場合の“ぞろ”にはどんな意味があるのかなあ。」と一言。そうねえ、「ぞろ目」とは2個のサイコロを振った時に同じ数字(目)が出ること。そして、そこから転じて、2桁以上の数列が全て同じ数字で構成されていることを示すんだけど、「揃目」と表記されるように、さいころの目が「揃う」ことから、「ぞろ目」という言葉ができたんじゃないかなあ。すると、すぐに中村さんから、「そう言えば“ぞろぞろ”なんて言葉もあるなあ。」という一言がありました。そうね、「ぞろぞろ」は「多くの人や動物などが引き続いて動くさま」を表す言葉だから、やっぱり「揃う揃う」が語源なのかなあ。しかしすぐに白砂さんが、「でも“そぞろ歩き”という言葉がありますねえ。この場合の“ぞろ”は“ぞろぞろ”の“ぞろ”と感じが違うんじゃないかなあ。」と一言。そこで、「そぞろ歩き」の語源や由来は私の宿題事項となりました。

「そぞろ」の起源は大和言葉「すずろ」

さて、「そぞろ歩き」についてインターネットを検索したところ、「そぞろ」を漢字で書くと「漫ろ」となるということが分かりました。「漫画」の「漫」ですね。そして、「そぞろ」は、もともと「すずろ」と言われていて、平安時代にはすでに使われていた大和言葉だということも。その後「そぞろ」は中世の古典文学の中に多く登場するようになり、「不本意なさま、思いがけないさま」「関係がないさま、何のゆかりもないさま」を意味する表現として、『平家物語』や『徒然草』などの古典の中に見ることができるというのですから、「ぞろぞろ」などとは生まれ育ちが生まれも育ちも違うというこ

とが分かりました。「気もそぞろ」などとしても使われる「そぞろ」は「そわそわとなぜだか落ち着かない」様子や「なぜだかわからないけどわけもなくそうになってしまうことを表したい」場合に使える言葉なのですから、「そぞろ歩き」は「当てもなく、気の向くままにぶらぶら歩き回ることを意味する言葉だったんですね。

世代間で違う使用語彙

最近友人が「なあ息子 孫の言葉は 日本語か」というシルバー川柳を紹介してくれました。日本語の使用語彙も世代によって大きく変わってきているのですね。私たちには「ズボン」、「ランニングう(シャツ)」、「ジャンパー」で充分通じているのに、孫の世代にはそれぞれ「パンツ」、「タンクトップ」、「ブルゾン」でなければわからなくなっているそうです。色の表現も、私たちが慣れ親しんでいる「紺」が「ネイビー」に代わってしまっているというのですから驚きです。「そぞろ歩き」といういかにも日本語らしい響きをもった言葉もきっと孫の世代には通用しない言葉になってしまっていることでしょう。“当てもなく、気の向くままにぶらぶら歩き回る”いわゆる「そぞろ歩き」をしているだけなのに、「何してるの」と聞いたら「ウォーキングです」などというブッキラボーな答えが返ってくるかもしれませんね。やはり、全員がオーバーセブンティで、共通の語彙で話し合えるアフターテニスのランチオン・ダベリングの機会は大切にしくちやと改めて思っています。

(完)